〔研究展望〕

漢字辞典をクールに使う

山崎　清巳

How to Use Kanji Dictionaries in a Cool Way

Kiyomi YAMASAKI

Abstract

This paper proposes a method of using Kanji dictionaries in a cool way. In Japan, we use computers with automatic Kanji systems. Therefore, it is very useful to confirm the Kanji code when choosing a Kanji dictionary. Comparing the etymologic structures of Kanji (Rikusho) by the two famous Kanji researchers Joken Kato and Shizuka Shirakawa we approach the very essence of Kanji. However, questions remain. Is it important to limit the number of Kanji or words? How can we cooperate using Kanji in East Asia? In order to confirm the priority level of certain Kanji, the author examined specific meaning parts and the school year allocation of Kanji. Finally, the author explains how to use Shirakawa's Kanji dictionary in a cool way.

keywords：etymologic structure of Kanji, JIS, Joken Kato, Kanji dictionary, Shizuka Shirakawa

はじめに

漢字辞典をクールに（賢く）使えるようにする方法を提案することが本稿の目的である。現在コンピュータで漢字を使うことは日常業務になっている。コンピュータ上での漢字の配列を確かめることは漢字辞典を選ぶ時の参考となる。ここでは漢字の成り立ちである六書は不変であるのか、加藤常賢と白川静という２人の著名な漢字学者の六書についての考えを比較することにより漢字の本質に迫る。漢字の数を制限すれば習得は容易になるとよく言われるが、制限したときの表現力はどれくらいか。いま常用漢字の改訂の動きはどうなっているか。部首と学年配当を再検討しながら漢字を調べる優先順位を確かめる。最後に常用字解の使い方を例示しながら、漢字の成り立ちについての確認すべき範囲を説明する。

コンピュータで使える漢字はどれくらいあるのか

漢字の使い方を考えるときコンピュータ上で使うことを抜きには考えられない時代となっている。コンピュータで漢字を使おうという動きは、いつごろどのように進められてきたのだろうか。コンピュータ上で漢字を使うという動きは、和田弘の「コード会のコード」（情報処理、vol. 1，No. 2 情報処理学会1960）に始まる。1974から３年計画で JIS 漢字コード開発を目指した漢字符号標準化調査委員は、現代日本社会で通用する漢字全体の集合を約10,000弱とし、基本度が高いと評価されている漢字集合約3,000を第１水準、さまざまな専門分野で用いられる漢字を第２水準として、漢字集合を２つの水準に分けた漢字集合の確定を目指した。第１水準は、当用漢字字体表、当用漢字補正案および人名用漢字別表を基本とし、都道府県名および市区町村名に使用される漢字が収録された。第２水準には、主要４漢字表に出現して第１水準から漏れた漢字が収められた。1978年に制定された JIS C6226は第１水準2,965字と第２水準3,390字を合わせて6,355字が文字コードとして規定されている。この文字数は、角川漢和中辞典の見出し字の約6,000字、漢字検定１級で出題される、常用漢字を含めて約6,000字の漢字（JIS 第２水準を目安とする）とほぼ同数である。

水準を分けることによって第１水準だけの実装が可能となり、性能の低い当時の低価格のワープロやパソコンでの漢字情報処理ができるようになった。

コンピュータの処理速度やメモリが急速に増えた1990年代以降ほとんどのシステムで第２水準まで使えるようになったので、第１水準か第２水準かを気にする必要はほとんどなくなった。しかし、約6,000字もある漢字フォントを作るには、手間と時間がかかるため、フリーのフォントなどでは第１水準しか収録してないフォントもある。

コンピュータの漢字辞典の配列はどのようになっているか

6,000字もの漢字の中には読み方さえ分からない漢字が多く含まれる。並び順については、基本漢字に当たる第１水準については代表音訓順、第２水準については新字源順（部首配列）となっている。このことによって普通に使われる漢字の大半が第１水準であるので、五十音順の範囲におさまるようになった。第２水準漢字が新字源順になったので、異体字が隣接することになり検索の便が大きく改善した。漢字をパーツに分けた「部首画数順」索引を付けることによって、6,355字の漢字表が誰でも使えるようになった。

さらに第１水準と第２水準を分けることにより、並べ替え（ソート）に決定的な効果が加わった。たとえば本学の名称を単漢字にして並べ替えると、学・久・業・工・大・米・留という五十音の順になる。これに対して、第２水準のような部首配列だと、久（ノ）・大（大）・学（子）・工（工）・業（木）・留（田）・米（米）（　）内は部首、の順に並ぶ。水準分けをしないと、意味も読みもわからない難しい「匈」の異体字である「丐（かい）」という漢字が、部首が「一」であるということで「一」や「三」などのすぐ後に並ぶことになり不都合が生じるであろう。

漢字字典を選ぶ基準を考える

ここで漢字字典の使用目的を考えて見よう。筆者が担当している「情報・メディア・文化」では、読み物風に字源を調べながら楽しく漢字を学んでもらうことによって、漢字に対する考え方や気分を一新するというのが目的である。前項で述べたようにコンピュータで漢字を使うには漢字コードを制定しなければならないが、漢字コード以外で基本漢字を制定したものに教育漢字と常用漢字がある。教育漢字の範囲で作られた漢字辞典や字源辞典も、あるにはあるが小学生用というイメージが払拭できない。そこで常用漢字の範囲におさまる加藤常賢の「角川字源辞典」と白川静の「常用字解」を比較しよう。角川字源辞典は常用漢字1,945字に人名用漢字（166）を加えた2,111字、常用字解は常用漢字とその旧字形の2,744字が収録されている。普通に使う2,000字程度が収録されている辞書だけでなく、かなり難しい漢字を調べるための収録文字数の多い辞書も常備していることが望ましいが、どちらか１つを選ぶとなると、2,000字程度の漢字辞典になる。それに収録されていないような漢字は図書館などで調べればいい。読み方だけならコンピュータを使っても調べることはできる。

角川字源辞典と常用字解の最も大きな違いは見出しの並べ方である。角川字源辞典は、漢和辞典の一般的な配列である部首配列である。常用字解は漢字辞典としては例外的な代表音訓による五十音順の配列である。しかし、ほとんどの漢字辞典は部首配列になっている。部首配列の漢字辞典では、調べている漢字の部首が何であるかが分からなければならない。たとえば「和」の部首は「禾」ではなく「口」である。会意など部首が特定しにくい漢字も少なくない。「尸しかばね」を部首とする常用漢字には尺、局、届、屋、属、層（教育漢字）、尼、尿、尾、屈、履があるが、このうちの尺、属、層、尿、屈、履には「尸」の意はない。たとえば「尺」は親指と中指で尺をとっている象形である。11字中６字が部首と意味を共有しないのである。これは例外的な部首の例であるが、部首や六書についても精査する必要がある。コンピュータで使われている漢字、JIS第１水準の漢字（2,965字）が代表音訓順、専門性の高いいわゆる難しい漢字からなる第２水準(3,388字)が部首を基本とする新字源順の配列が採用されていることを考えると、十分に熟達していない学習者には字音による五十音配列の常用字解の方が好ましい。

六書は不変だろうか

六書とは、象形、指事、会意、形声と仮借、転注をいう。前の四者と後の二者は意味合いが異なる。象形は物の形を象る（人、止など）。指事は事物の関係を示す（上、下など）。会意は二つ以上の字の要素、象形や指事の字を組み合わせて、新しい意味

を表す。「歩」は左足の足跡と右足の足跡を前後に連ねた形、足を前後させて歩く意となる。形声は音符（声符）によってその字の音を表す。川や水に関係のある字を分類して氵（さんずい）という限定符（意符）をつける。木の名は木偏、金属は金偏をつけて分類するというのが白川静の解釈である。また加藤常賢のように「声符」と「意符」を合わせて一字にしたという解釈もある。声符は音だけを表すのか意味も表すのかで解釈が異なる。漢字の90%は形声であるという加藤の主張と白川の解釈を合わせると、初期の形声は白川の解釈に合致することが多く、ある程度の漢字が蓄積されてからは、記号と記号の組み合わせにより多くの漢字が成立していったと考えられよう。

仮借は、字の形成法でなく字の用法、当て字である。意味に関連がある「令、長など」とそうでない数字や代名詞などがある。

転注には定説がない。「畐（ふく）」という音符によって「ふくらんだもの（福、幅）」、「侖（りん）」によって「ひとつながりに連なったもの（倫、輪）」などの意味が与えられる。音符が同じである字は、音だけでなく意味も共有する関係にあるというのが白川静による転注の解釈である。

加藤常賢と白川静の考え方の比較

二つの辞典の最大の違いは見出しの配列にある。加藤が部首配列であるのに対して白川が五十音配列である。JIS 漢字コードが制定された1978年に没した加藤常賢にとって、五十音配列は考えとしてないものであったかもしれない。白川静が没したのは2006年で、ほぼ一世代新しい研究者である。五十音配列で漢字を並べることは、コンピュータなどへの対応に有利であるばかりでなく、「尸」のように、分類に関して不適切な部首もある。加藤常賢と白川静について六書の中の会意と形声を比較すると、歴然とした違いとなって現れる。

表1　白川静と加藤常賢の六書の割合

	白川		加藤	
	教育	常用	教育	常用
象形	18%	13%	15%	10%
指事	1%	1%	1%	0%
会意	32%	26%	15%	13%
形声	49%	60%	69%	76%
仮借	1%	1%	0%	0%
国字	0%	0%	0%	0%

表1を見ると、会意については常用漢字で加藤が13%（15%）、白川が26%（32%）、形声については常用漢字で加藤が76%（69%）、白川が60%（49%）となっている。（　）内は教育漢字。会意と形声の他にはこれほど大きな差がないことから考えると、加藤は形声として解釈する傾向の高い漢字学者で、白川は会意として解釈する傾向の高い漢字学者である。このように六書の特定は個々の研究者によって異なる。表2には、会意、形声を含め白川静と加藤常賢の二人について六書についての解釈がどれくらい一致するかを示している。教育漢字で64%、常用漢字全体で71%、教育漢字を超えた常用漢字では78%が一致している。難しい漢字になるほど六書についての解釈は一致する傾向がある。以上ことから六書とは安定したものではなく学説に過ぎない、特にやさしいと思われている実用的な漢字ほど解釈が難しいことが分かる。角川字源辞典と常用字解の両方を学習者が常備する必要はないが、指導者は両書を常に参照して一致する漢字としない漢字を確認しておく必要がある。一致する漢字については問題ないが、一致しない場合には両方を並べるとか、指導者自身の判断であることを明らかにしたうえで教える必要がある。形声として解釈する傾向の高い加藤は、漢字を記号として扱っているといえよう。また甲骨文や金文を繰返してトレースすることによって漢字の成り立ちに迫るという手法をとっている白川の解釈は呪術的なものが多い。特に「口」の解説は次のようになっている。「象形。甲骨文字や金文には、人の口とみられる明確な使用例はなく、みな神への祈りの文である祝詞を入れる器の形のサイ（㕯）である。古・右・可・歌・召・名・各・客・吾・吉・舎・害・史・兄・祝・啓・品・区・臨・厳などに含まれる口はみなサイと解することによって、初めてその字形の意味を理解することができる。もとより人の口の字もあって、およそ二千数百年前の古い書物である〔詩経〕や〔書経〕にもみえている。口とサイとの異同を確かめることはできない。」白川静の常用字解の箱や表紙の図案はこのサイであり、文化勲章の受章に際して「口」の研究が重要であったという自負が見て取れる。加藤の説明には「口」

の形という以外の説明はない。

表2　白川と加藤で六書の一致した割合

教育漢字	64%
常用漢字	71%
教育漢字を超えた常用漢字	78%

漢字や単語の数を制限しようという流れ

古くは新井白石や賀茂真淵、明治以降では前島密や福沢諭吉などが漢字の字数の制限の提唱者として有名である。福沢諭吉の文字乃教には、609字の単漢字が合計895字、641句の漢字熟語が合計661回使われている。福沢諭吉の600という漢字の字数は、戦前の6年卒業時の全国平均500、都会の平均600であったという報告の都会の平均と一致しているし、1979年の京都市にある36の中学校の平均が717字ということを考えると妥当な数である。ただし、「厩」「爰」など現時点でほとんど使われないような漢字も含まれている。漢字コードの制定に当たった当時の漢字コード委員会主査の林大は、JISコードを制定するにあたって「1,000字なり2,000字なりの実用的な漢字セットは含まれる」と発言している。この発言は約1,000字が教育漢字であり、約2,000字が常用漢字であるという事実と一致している。

字数や単語数の制限は、日本語に限るわけではない。1930年にC. K. OgdenはBasic English－基礎語850語とその使用ルールーを発表した。動詞16：be, have, do, make, get, give, put, take, keep, let, go, come, seem, say, see, send, 助動詞2：may, willを中心に効率良く選ばれた850語と使用ルールを使えば20,000語にも相当する表現が可能になるというのである。

常用漢字の改訂の動き

新漢字表2基準の部首存在　字体混在　反発と歓迎　日本経済新聞　2009年4月11日朝刊によると、1981年に定められた常用漢字を現行の1,945字から2,131字に増やそうという動きの中で、「謎」「遜」「遡」の3字の「しんにゅう」を1点しんにゅう(辶)にするか2点しんにゅう（辶）にするかで議論が起こっている。現在の常用漢字のしんにゅうの点は1点である。2点しんにゅうにしたいというのは、収録文字数が最も多いことで権威のある康熙字典のしんにゅうは2点しんにゅうになっているから、2点しんにゅうにしたいというのが、その理由のようである。康熙字典は48,641字もの漢字が収録されている漢字字典である。しかし1点しんにゅうでも2点しんにゅうでも、その違いさえ、気がつかない気にしないユーザーの方が多いのではないだろうか。

それよりも東アジア地域で使われる漢字の主力である中国大陸の簡体字、台湾や韓国で使われる繁体字（正字）、日本の字体などに対する対策を考える方が急務であると記事は結んでいる。

漢字を調べるときの優先順位

漢字を制限しようという流れと制限を外そうという二つの流れがあるが、この議論の中に踏み込むのは得策ではない。優先順位の高い重要な漢字から順に調べるようにすれば、この議論を避けて通ることができる。優先順位の高い重要な漢字とは何か。第1水準の漢字の方が第2水準の漢字より重要である。第1水準の中でも常用漢字の方がそれ以外の第1水準の漢字より優先順位は高いであろう。常用漢字の中では教育漢字の方が教育漢字以外の常用漢字より優先順位は高いであろう。教育漢字の学年配当の数を見てみよう。1年80字、2年160字、3年200字、4年200字、5年185字、6年181字となっている。この数字を見ると1-4年配当の漢字（640字）は何が何でも教えようという意気込みが感じられるが、5-6年配当の漢字数を見ると、とってつけたような数になっているのはいなめない。

表3　学年配当と形声の割合

	学年配当	白川	加藤
1年	80字	1.0%	2.1%
2年	160字	5.0%	9.0%
3年	200字	10.2%	14.3%
4年	200字	9.6%	14.5%
5年	185字	11.5%	15.5%
6年	181字	11.1%	13.9%

難しい漢字には形声が多く、3年に配当されている漢字から形声字は急激に多くなる。簡単だと思われている漢字の多くが象形、指事、会意である。白川静によると、常用漢字に指事字は11字あり、そのうち「一、二、三、四、八、十、百、上、下、本」の10字が1年配当の教育漢字、「末」だけが4年配当の教育漢字である。1年配当の漢字の多くは英語

などの機能語に相当する。これらが漢字の基盤であることは一目瞭然である。だからといって説明が簡単だとは言えない。字源を調べながら1年配当の漢字から学習し直すことは、ヒトが言語を獲得する過程、言語や表現の進化、物や言葉の分類を再確認することである、すなわち歴史と哲学を追体験することにほかならない。

部首を利用した漢字の優先順位

「尸」が部首となっている漢字のように、分類の指標とならない部首もあるが、全ての部首がそうだというわけではない。教育漢字を部首によって分類すると、「人（にんべん）」の漢字が51、「氵（さんずい）」47、「木（きへん）」46と続き、10字以上の漢字を従える部首が30ある。この30の部首に属する漢字の数は614字で教育漢字の60％を超える。4字以上を従える部首が72あり、属する漢字は80％を超える。また福沢諭吉の「文字乃教」に出てくる895字の漢字は「人」18、「一」14、「物」10、「日」9となっている。「人」という漢字が人にとって最も重要な漢字であることは言うまでもない。これらの事実から部首を指標とした分類法は学年配当と組み合わせれば漢字を調べる順序の基準となり得る。

常用字解をクールに使う

大学生が漢字を学ぶということを考えると、小中学校で教えるのは不適切だと思われるような内容も提供できる。たとえば、「色」解説：会意。人と卩（せつ）とを組み合わせた形。卩は跪（ひざまず）く人の形であるから、人の後ろからまた人が乗る形で、人が相交わることをいう。獣の上に人が乗る形は犯である。色は人が相交わるときのような感情の高揚する意味に用い、おどろく様子を色斯（しょくし）・色然（しょくぜん）、むっとして怒った表情になることを気色ばむのようにいう。高揚した感情は表情、顔色に表れるので、顔色の意味となり、色候（しょくこう）（顔いろに表れる病状）のようにいう。「かおいろ」の意味から、「つや、つややか、いろどり、いろ、おだやか」などの意味に用いる。

角川字源辞典の色は、人が性交をする意。意符「人」と声符「巴または卩」からなる形声字。「巴」の表す意味は「属（しょく）」（交合の意）あるいは「接（せつ）」（交接する意）とみてもよい。

以上のように、会意と形声のように六書での差はあるが、意味は同じである。

象形の説明は形の説明だけで十分である。指事である「上」の解説は次のようになっている。指事。掌の上に指示の点をつけて、掌の上を示し、「うえ」の意味を示す。下は掌を伏せ、その下に指示の点をつけて、掌の下を示す。のち指示の点は縦の線となって上の形となり、さらにその傍らに点を加えて上・下の形となった。掌の上の意味から、すべてものの「うえ、うえのほう」の意味となり、上に「あげる、のぼる」の意味となる。場所的に「かみ」、時間的に「はじめ、むかし」の意味となり、人間関係では「めうえ、たてまつる、たっとぶ、すぐれる」の意味となる。「上」や「下」については、反意語の部分を書かせるか書かせないか、意見の分かれるところであろう。

「歩」を例に会意を説明する。「左足の足跡と右足の足跡を前後に連ねた形」という形の説明まででではなく「足を前後させて歩く意となる」まで、2つの文字が組み合わさって新しい意味になるところまで書くように指導すべきである。

「雲」を例に形声を説明する。『声符は云（うん）。云は雲の流れる下に、竜の捲（ま）いている尾が少し現れている形で、「くも」をいう。云が雲の元の字である。のちに雨を加えて雲の字となり、云は「云（い）う」のように別の意味に使われるようになった。』までを意味を考えながら書き写すように指導する。元々「雲」の意であった「云」に限定符（意符）「雨」がついて「雲」に限定して使われるようになった。「雲」という字に「雲」という意を取って代わられた「云」は「云（い）う」という別の意味に使われるようになったことを理解させたいものである。漢字を調べてから、どこまでを抜き出すかという指導が非常に重要である。

日本で作られた漢字を国字という

最後に国字について述べて本稿を終わりたい。教育漢字には「働」と「畑」という二つの国字（日本で作られた漢字）がある。第1水準の漢字は代表音訓配列になっているということは繰り返し述べて来た。代表音なら納得できるが代表訓とは何か。「畑」という国字に音はない。教育漢字以外には峠や裃などがあり、国字の大半が会意である。漢字の成り立

ちを会意で説明する日本人が多いが、形声よりも会意で説明する傾向の高い白川静のような学者でも、難しい漢字になれば形声が多くなる。「図書館」や「新聞」など日本で作られた熟語が漢字の本場の中国で使われるようになった例は少なくない。常用字解の「働」という国字の説明には、「形声。音符は動。動は力（耒すきの形）に従い、もと農耕に従事することをいう。働はわが国で作られた字であるが、明治以後の欧米語の翻訳語に使用したものであろう。稼働（はたらくこと。また、機械を動かすこと）・労働（はたらくこと）のように「はたらく」の意味に用いる。のち中国でも使用されるようになった、」とある。国字では一般的な会意ではなく、形声であるがゆえに本場の中国でも使われるようになったという白川静の感動が伝われば幸いである。

参考文献

1）福沢諭吉　文字乃教　1873年　http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/fukuzawa_title.php?id=73
2）C. K. Ogden A General Introduction with Rules and Grammar 1930
3）ユズリハ　サツキ　教育問題としての漢字　カナノヒカリ　1971年
4）加藤常賢　角川字源辞典　角川書店　1972年
5）牧雅夫　自分で使える英語：ベーシック・イングリッシュ　北星堂　1984年
6）芝野耕司：漢字・日本語処理技術の発展　漢字コードの標準化　情報処理、vol. 43No. 12情報処理学会（2002）
7）白川静　常用字解　平凡社　2003年